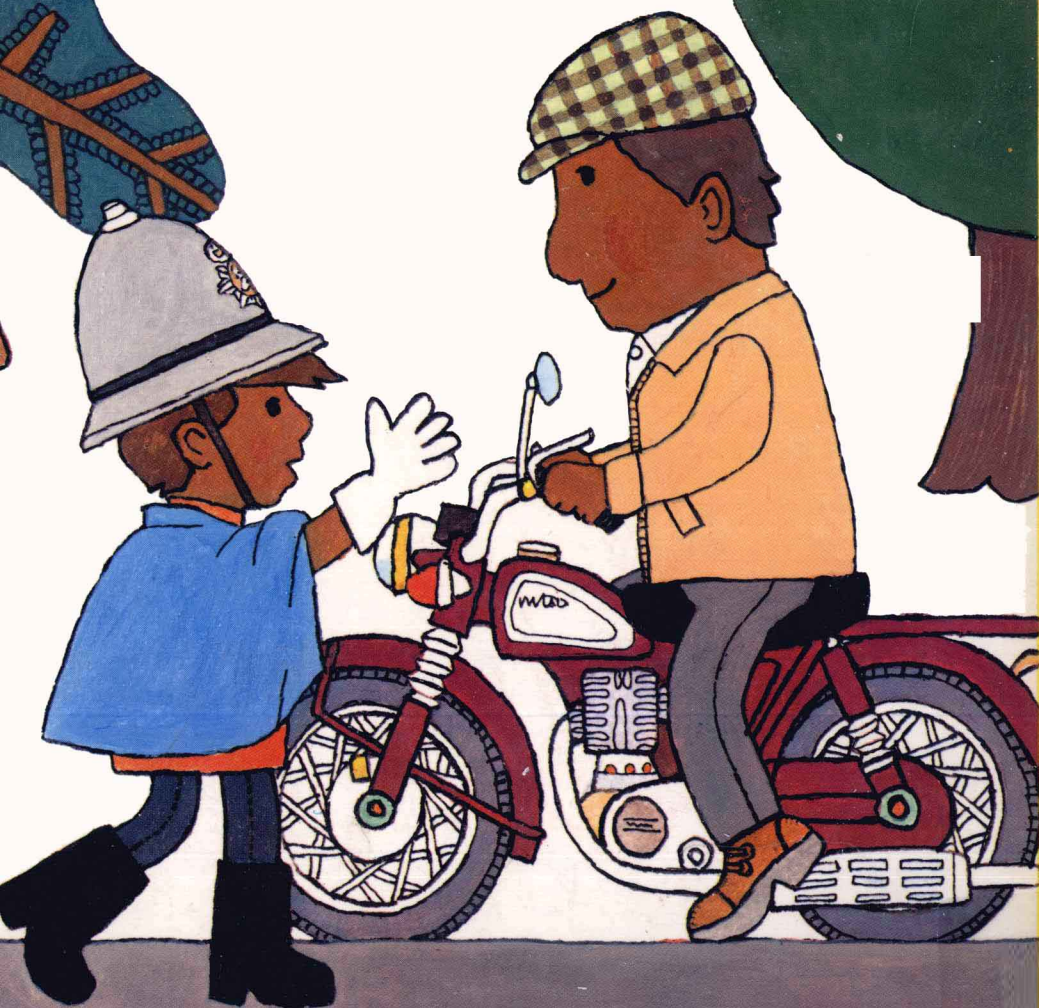


しょうねんけい かん
少年警官ジェームズくん

クラーク 作 もろつき たけひと
望月武人 訳

きた たくし
北田卓史 画



おうぶんしゃ としよかん
旺文社ジュニア図書館

N. D. C. 933 P. クラーク (Clark, Pauline)

少年警官ジェイムズくん
(JAMES the Policeman)

P. クラーク作 望月武人訳

旺文社 昭和53 (1978)

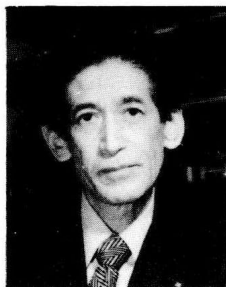
152P さし絵 23cm (旺文社ジュニア図書館)

編集委員

神宮輝夫
福田清人

滑川道夫
山室静

波多野
(五十)



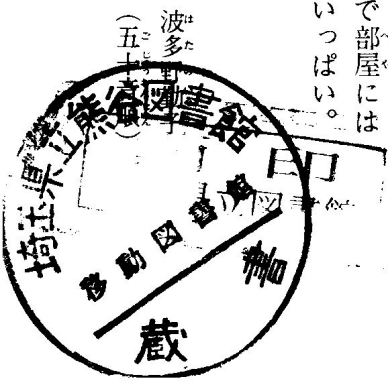
* 絵をかいた北田卓史先生

一九二一年、東京に
生まれました。たくさ
んの子どもの本に絵を
かいています。先生も
車が大好きで部屋には
ミニカーがいっぱい。



* この本を訳した望月武人先生

一九三七年山梨県に
生まれました。青山学
院大を卒業後、小学
の先生をしながら、外
国の本を訳したり、研
究を続けています。



しょう ねん けい かん
少年警官ジェイムズくん

さく もちづき たけひと やく きた だ たく し え
作 望月武人 訳 北田卓史 絵



と しょう かん
ジュニア図書館

もくじ

一 目撃者^{もくげきしや}はジエイムズ 7

二 ジエイムズ、事故^{じこ}のもようを話^{はな}す 27

三 ジエイムズ、ヘルメットを買^かう 47

四 二人^{ふたり}の新米警察官^{しんまいけいさつかん} 69



五 あやしい^{もの}者を追跡^{ついせき}する 90

六 ジエイムズ、パトカーに協力^{きょうりやく}する 108

七 サクスフレイジ卿^{きやう}が

ジエイムズのところへ来^くる 130

作者^{さくしや}ポーリン・クラークについて

神宮輝夫 145



少年警官ジ
エイムズくん

一 目撃者はジェイムズ

ジェイムズは警察官になってみたいと、いつも思っていました。でもそのわけは、だれにもわかりません。

お父さんが警察官だからだって？ いや、お父さんは警察官じゃあないから違います。

きつと、ジェイムズが、おもちゃの自動車やトラックをたくさん持っていたからでしょう。

ジェイムズは、自動車や手荷物運送車、トレーラーつきトラック、ほろ



なし貨車、射撃制動機、陸軍用トラック、小銃運搬車、クレーンつきトラック、消防ポンプ、救急車、バス、二階だてバス、牛乳配達車——それはそれはいろんな自動車をいっぱい持っていました。

ジェイムズは、このおもちゃの自動車やトラックを使って、すごい交通じゆうたいをつくるのが好きでした。妹のポリーも、その時はいつも手伝いました。

警察官のジェイムズは、その交通じゆうたいを整理したり、スピードいはんの車をとりました。また、その車もよく使いました。そこには、四つのガソリン

ポンプがそなえつけてありました。

ジエームズは、信号機を二、三台と時速五〇キロの標識を一つ、しま馬もようの横断歩道の一つ、それとおもちやの警察官一人を持っていました。

五〇キロの標識は、村の通りと大通りの角にありました。

ポリーは数をおぼえたところ、この五〇という数字がどういう意味なのかわかりませんでした。

その標識が、ボウリング夫人のへいの近くにあつたから、ボウリング夫人が五〇さいだという意味なのか、それともこの道路には五〇けんの家があるという意味なのか——そんなふうに思っていました。

このせまくて曲がりくねった村の通りでは、だれでも、時速五〇キロ以

上^{じやう}だしてはいけないのだと、ジエイムズはポリーに説明^{せつめい}しました。

ところで、横断^{おうだん}歩道^{ほどう}は、ゼブラ・クロッシングといえますから、しま馬^{うま}の横断^{おうだん}という意味^{いみ}にもなるのです。

だからポリーは、初めて町^{まち}へ行^いって、しま馬^{うま}もようの横断^{おうだん}歩道^{ほどう}を見^みた時^{とき}がっかりして泣^なきだしてしまいました。

「しま馬^{うま}はどこにいるのよう」

しま馬^{うま}が、たてがみをふりながら、大^{おお}いばりで走^{はし}って行^いく間^{かん}、車^{くるま}やバスがきちんと規則^{きそく}を守^{まも}ってそれを待^{まち}っているのが、しま馬^{うま}もようの横断^{おうだん}歩道^{ほどう}だとポリーは思^{おも}っていたのです。

「とにかく、牛^{うし}の横断^{おうだん}といえば、牛^{うし}がほんとうに横断^{おうだん}することだろう。

子供こどもの横断おうだんといったら、子供こどもが横断おうだんするんだろう。どうして、しま馬うまの横断おうだんの時ときだけちがうのかなあ」

ジェイムズはふしぎでなりませんでした。

それをきいたジェイムズのおかあさんは、「うまく説明せつめいできないわね」といいました。

さて、ある晴はれた日ひのことです。授業じゅぎょうを終おわって、ジェイムズはみんなといっしょに、学校がっこうを出でました。

ジェイムズは、ひうち石いしのへいを棒ぼうではちぱちならしながら、走はしっていると、友ともだちのアンデイがかけよってきて、いいました。



「なあ、ジェイムズ！　ティムを追っかけようぜ」

でも、ジェイムズは追いかけたくなかったので、アンディがティムにか
かっていくのを見ているだけでした。

アンディとティムは、もつれ合うようにして、走って行きました。

二人は、左右を見ないで、そのまま大通りにとび出してしまいました。
そのしゅんかん、チェックのぼうしをかぶった男の乗ったオートバイが、
曲り角を回って来たのです。オートバイはブレーキをキーツとならして、
道ばたの砂にぎざっとつっこみました。

ティムがよろけてたおれ、チェックのぼうしの男はオートバイからころ
げ落ちました。

「ガチャン！」

オートバイがたおれました。

通学路にいたジエームズは、この事故を初めから終わりまで、すっかり見ていました。

ほんの一瞬おいて、あんまり驚いて、口がきけなかったティムが、大声で泣き出しました。それから、衝突しなかったアンデイの方も大声で泣き出しました。

「まあまあ、まだ、死んでやしないんだ」

とチェックのぼうしの男がいました。

その男の人は、ビル・ガンブルさんという人でした。